

第15回 豊川流域圏自然再生検討会 議事概要

開催日時：令和4年9月30日（金）14:00～16:30

開催場所：豊橋河川事務所 2F 会議室

1. 開 会

2. 挨拶（豊橋河川事務所 所長）

3. 議 事

（1）第14回 豊川流域圏自然再生検討会 主な意見と対応

事務局より説明した。意見等なし。

（2）豊川自然再生事業の概要

事務局より説明した。委員からの主な意見は、次のとおり。

<ヨシ原再生>

- ・放水路にヨシ原を再生したことで、治水機能への影響はみられていないか。土砂堆積による影響等の知見は、今後の自然再生事業の参考となる。
→放水路のヨシ原の施工幅は、流下能力を考慮して設定している。現状、土砂が顕著に堆積している箇所は確認されておらず、治水機能の低下が懸念される状況はみられていない。（事務所）
- ・調査項目の「景観」について評価を行うこと。また、事業評価におけるアンケート調査において住民の評価が向上しているか確認すること。
→事業評価等のアンケート調査結果から、景観の評価が可能か検討する。（事務所）
- ・ヨシ原の形状がオオヨシキリの繁殖状況に影響している可能性も考えられる。本川と放水路のテリトリー数の違いについて、ヨシ原の形状と関連した考察があるとよい。
→現状では、オオヨシキリの繁殖に最適なヨシ原の条件は不明である。今後もモニタリングを継続しながら考察する。（事務所）
- ・オオヨシキリの巣跡確認数と出水（最高水位）の関係は興味深い。放水路の巣跡は、出水により消失することもあるということか。令和3年度は巣跡が確認されなかったが、大きな出水の影響を受けており、実際には巣があったと捉えていいか。
→そのように認識している。出水の影響を受けても、翌年度には再び営巣が確認されている。（事務所）
- ・鳥類の種数の経年変化グラフについて、「第3工区」（未調査時期のある工区）の結果を除外しているが、その後の調査年数が蓄積されてきているため、全地点分のデータを示してもらいたい。平成31年度に追加した地点についても、経年変化を示してもらいたい。
→次年度から全地点のデータを注記付きで提示する。（事務所）

- ・鳥類の水生動物食種の種数は放水路が本川より多いが、具体的にどのような鳥類で、何故多いのか。

→水生動物食種の例としてクイナ類等が挙げられる。放水路は、本川と比べてヨシ原の連続性が高いため種数が多いと考えている。(事務所)

<干潟再生>

- ・底質調査の結果をみると、本川と放水路で粒度分布の差がみられているが、本川と放水路の流速や、出水時における分流堰での流量配分、流砂量等を把握しているか。中州の右岸側に堆積している自然堤防状の土砂は、放水路から供給されているように見える。
→流速や流砂量等は調査していない。中州右岸側の地盤高や自然堤防の形状変化については把握できていない。(事務所)

- ・干潟の土砂の入れ替わりについて、少しでも情報を得るような調査を考えた方がよい。
→干潟の流況解析を行うため、洪水末期の水面勾配の計測等の実施を検討する。(事務所)

- ・今後、土砂動態が変化して、河口の干潟形状や底質が変化することを漁業者は心配している。干潟の土砂由来や土砂収支を把握するための定量的な調査や評価を行った方がよい。

→土砂動態を推測する手法について助言をいただきながら検討する。(事務所)

- ・造成干潟の底質は細砂が多く有機物量が少ないが、将来的に自然干潟の底質の粒径に近づき、アサリが生息できるようになるか確認するため、経年的な底質の変化に対するアサリやハマグリが生息状況の変化を、地点別、自然・施工干潟別に解析した方がよい。
→現状、施工干潟の地点別の経年変化グラフでは、粒径や強熱減量の変化は特にみられていないが、今後も引き続き解析する。(事務所)

- ・アカエイやナルトビエイが河川内に多く出現するようになってきているという報道があったが、海側で二枚貝等の餌が減ったので、川に上がってきている可能性もある。干潟を利用する人にとっても危険なので出現状況に留意した方がよい。

→昨年度の委員会において、魚類の調査頻度は数年おきにすることを審議したが、魚類相の変動が指摘されているため、毎年調査を継続することとし、当該種の出現状況に留意する。(事務所)

<アサリ着底稚貝調査>

- ・春先の着底稚貝の移動に関係している南向きの流れは、干潟地形によるものと思われる。干潟再生の施工で中州の堆積部を掘削すると、稚貝輸送の外力である流況が微妙に変化して、着底稚貝の移動も変化する可能性があるため、施工は慎重に行った方がよい。
→現在のアサリの主要分布範囲は豊川橋より海側なので関係性は低いのではないかとと思われるが、施工方法は慎重に検討する。(事務所)

- ・河道部の汽水域は生まれたばかりのアサリが生息するために重要な生息環境であり、良好な餌料環境であると予測される。引き続き河道部の調査も継続することが望ましい。

→当面は着底稚貝の主群が育つ環境である河口部を重点的に調査していくこととしている。今後の調査結果や途中経過を踏まえながら、河道部の調査の追加実施を検討する。(事務所)

- ・餌料環境調査では、サイズ別クロロフィルの分析結果と植物プランクトンの同定結果の関係を解析してもらいたい。アサリの卓越年級群ができる時は餌料環境が良い時という情報もあるので、餌料環境の内容についてもう少し解析できるとよい。
- ・豊川の窒素・リンは20年前に比べて半減しており、漁業者は栄養塩が非常に少なくなっていることを危惧している。今後豊川の水質がどのように変化するのかも含めて議論してもらいたい。
- ・三河港湾事務所と連携した取り組みにより、有益な結果が得られつつあるので、今後も連携を継続してもらいたい。

4. 閉 会

以上